




病害虫発生予察情報予報第 6 号 (9 月の予報)



佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	9 月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
(早植え) 水稲	トビイロウンカ	並	 トビイロウンカ  コブノメイガ
	紋枯病	やや多	
	斑点米カメムシ類	やや多	
(普通期) 水稲	トビイロウンカ	並	
	穂いもち	並	
	紋枯病	やや多	
	斑点米カメムシ類	やや多	
	コブノメイガ	多	
	白葉枯病	並	
<p>1. トビイロウンカ 本種の発生状況は、田植え時期、水稲の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図(共通-図1)を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。</p> <p>2. コブノメイガ 発生がやや多くなっている。止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、各圃場における発生状況を確認し、幼虫ふ化揃い期である発蛾最盛期の7日後に薬剤防除を実施する。</p> <p>3. いもち病 一部で葉いもちの発生が多い圃場が見られる。葉いもちの発生が確認される圃場では、穂ばらみ期～出穂期の薬剤防除を徹底する。穂いもちの発生が多くなると予想される場合には、穂ぞろい期にも防除を行う。</p>			
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	 カメムシ類
	カメムシ類	やや多	
	紫斑病	並	
<p>1. カメムシ類 圃場内でカメムシ類が散見されており、今後の発生が多くなると予想される。被害を防ぐため、圃場ごとの本種の発生状況や大豆の生育状況を確認し、莢の伸長初期～子実肥大中期に防除を徹底する。発生が多い圃場では、7～10 日間隔で 2～3 回防除を行う。</p>			
普通作全般	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺の環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	やや多	 炭疽病 汚斑型病斑
	うどんこ病	並	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	多	
	アブラムシ類	並	
	1. 苗立枯症（炭疽病、疫病、萎黄病） 苗の立枯れ及び炭疽病による葉の汚斑型病斑が複数の圃場でみられている。また、向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている。本圃での立枯れを防ぐため、発病株の持ち出し処分や降雨前の薬剤散布、通風の確保等、防除対策を徹底する（令和5年7月26日付け病虫害対策資料第4号参照）。		
2. ハダニ類 本圃へ持ち込まないように、定植前までの防除を徹底する。			
アスパラガス	茎枯病	並	 褐斑病
	褐斑病	やや多	
	斑点病	並	
	アザミウマ類	少	
	ハダニ類	やや多	
1. 褐斑病 発生が増加しており、今後発生がやや多くなると予想される。週間天気予報により曇雨天が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする等の対策を徹底する。既に発生が見られるまたは多発生が見込まれる場合には、浸透移行性の薬剤を散布する。なお、薬害の発生を防止するため、薬剤の乾きにくい条件での散布をさける。			
タマネギ	1. ペと病、乾腐病 苗への感染を防ぐため、育苗圃のバスアミド微粒剤による土壤消毒を確実にを行う。また、乾腐病菌は、育苗トレイに残存し次作の伝染源となる可能性が報告されているため、トレイは新品もしくは消毒したもの（付着した土を水洗して除去した後、60℃の温湯に10秒間浸漬、あるいはケミクロンG 1,000倍液に10分間浸漬）を必ず使用する。		
野菜・花き共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ シロイチモジヨトウ)	やや多	 シロイチモジヨトウ
	シロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が平年より多い。苗床及び本圃で発生状況を確認し、本虫の若齢期の防除を徹底する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 チャバネアオカメムシ
	<p>1. 果樹カメムシ類 ヒノキ毬果での寄生数が多く、予察灯での誘殺数も多くなっているため今後の発生動向に注意する。果樹園への飛来時期は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察する。飛来が確認されたら、直ちに合成ピレスロイド系薬剤またはネオニコチノイド系薬剤で防除する。両系統の薬剤の残効期間は10～15日程度である。なお、ネオニコチノイド系薬剤は30～50mm程度の降雨で防除効果が低下するため、散布後に同雨量以上の雨が降ったら再散布する。また、地域全体で一斉防除を行うと高い効果が得られる。施設栽培では、開口部に防虫ネット(4ミリ目合い以下)を設置する。</p> <p>2. 夜蛾類 高い夜温が続く年には、夜蛾類の活動が活発になり被害が多くなる。園地周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等の植物は、夜蛾類の幼虫の食草であるため除去する。忌避灯設置園では、点灯時間を日没、日の出の時刻に合わせてとともに、確実に点灯していることを確認する。</p>		
カンキツ	かいよう病	多	 かいよう病
	黒点病	やや多	
	ミカンハダニ	やや多	
	チャノキイロアザミウマ	並	
<p>1. かいよう病 無機銅水和剤(クレフノン200倍加用)で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は20～25日である。無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると、無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前～前日までに必ず無機銅水和剤を散布する。 発病した枝や葉は伝染源となるため除去・処分する。ただし、強剪定は行わない。</p> <p>2. 果実腐敗対策 収穫時に果実に傷を付けないよう丁寧に扱うとともに、日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので取り除き処分する。薬剤は、収穫7～10日前に薬液が霧状になるノズルを使いかかりムラがないように果実全面に散布する。なお、薬剤散布後に100mm以上の降雨があった場合は再散布する。</p> <p>3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では、防除を徹底する。</p>			
ナシ	黒星病	やや少	 ハダニ類
	ナシヒメシンクイ	やや多	
	ハダニ類	やや多	
<p>1. 収穫後の防除(ハダニ類、チュウゴクナシキジラミ) ハダニ類、チュウゴクナシキジラミが多発すると早期落葉の原因となるため、収穫後も圃場を観察し、これらの発生が確認される場合は防除を行う。なお、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。</p>			

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
ブドウ	べと病	やや多	 べと病
	褐斑病	並	
1. 収穫後の防除 べと病等の発生が確認されているため、病害による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。			
茶	カンザワハダニ	やや多	 輪斑病 炭疽病
	クワシロカイガラムシ	やや少	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	
	チャノコカクモンハマキ	多	
	チャノホソガ	多	
	炭疽病	多	
	輪斑病	多	
1. チャノコカクモンハマキ 9月中～下旬頃が重点防除時期である。葉がつづられると防除効果があがりにくいいため、適期（発蛾最盛期から7～10日後）に防除を行う。 2. 輪斑病 発生が平年より多くなっている。本病は、高温期に発生が多く、整枝時の傷口から感染しやすいため、整枝後は直ちに防除を行う。 3. 炭疽病 秋芽生育中の園では、降雨が多いと秋芽でも多発する。秋期の発生は、翌春一番茶の収量・品質に影響が大きいいため、秋芽生育期（萌芽期～三葉期）の防除を徹底する。 4. カンザワハダニ 秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに防除を行う。散布の際は、本虫の生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。 5. チャトゲコナジラミ 多発した茶園では、葉裏に薬剤が付着しやすいように、裾刈り等を行った後に防除を行う。成虫期の防除は効果が劣るため、園内の発生状況をよく観察して、成虫が見られなくなった頃（若齢幼虫期）に防除を実施する。			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害防除のてびき」も参照してください。

佐賀県病虫害防除のてびき掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321928/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

9月の気象条件

- 病害虫の発生に關与する 9 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 5 年 8 月 24 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に關与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 9 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に關与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	20 (24.5℃)	70	高い
降水量	20	40 (169.3 mm)	40	やや多い

Ⅲ. 9月の予報

水稲（山間早植え）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：12 圃場
調査日：8月21日



定期調査圃場の様子（山間早植え水稲）

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率 0% (平年 9.2%、前年 0.7%)

平年比：やや少 (一～±)

(2) トビイロウンカの飛来状況

本年は複数回の飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から8月15日までの総捕獲数は、平年並 (±)

(3) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (＋)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

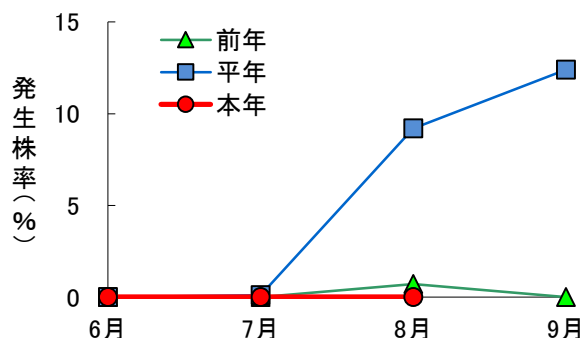


図1 山間早植え水稲でのトビイロウンカの発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率 1.7% (平年 1.2%、前年 4.3%)

平年比：並 (±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件 (＋)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

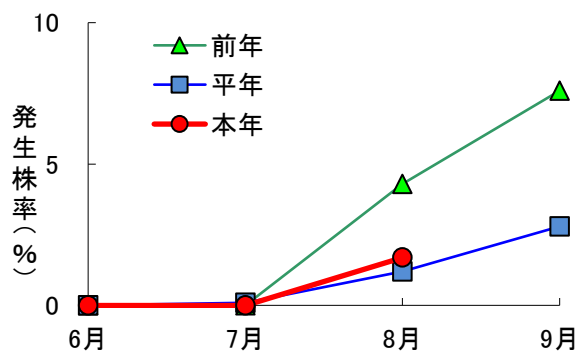


図1 山間早植え水稲での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等)

水稲（普通期）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（普通期）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：48圃場
調査日：8月21～24日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生状況

①定期調査(図1参照)

発生株率 0% (平年 4.9%、前年 0.3%)

平年比：やや少く(一～±)

(2) トビイロウンカの飛来状況

本年は複数回の飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から8月15日までの総捕獲数は、平年並である(±)

(3) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(＋)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

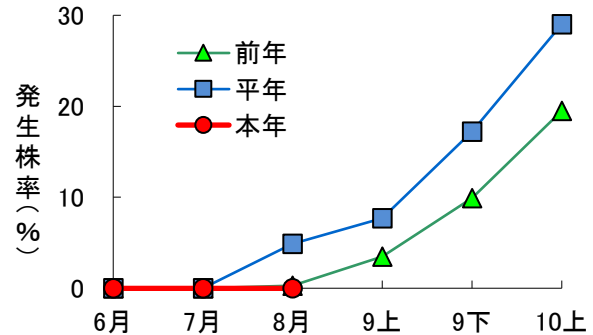


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査(図1参照)【葉いもち】

発生株率 4.5% (平年 14.5%、前年 10.9%)

平年比：やや少く(一～±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

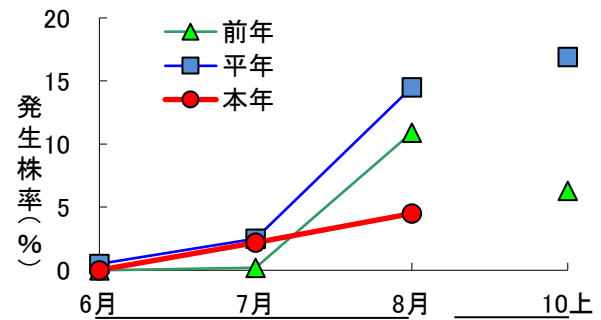


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

3. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査(図1参照)

発生株率 1.0% (平年 2.5%、前年 3.1%)

平年比：やや少く(一～±)

②イネの生育状況(中晩生品種(さがびより、もち品種))

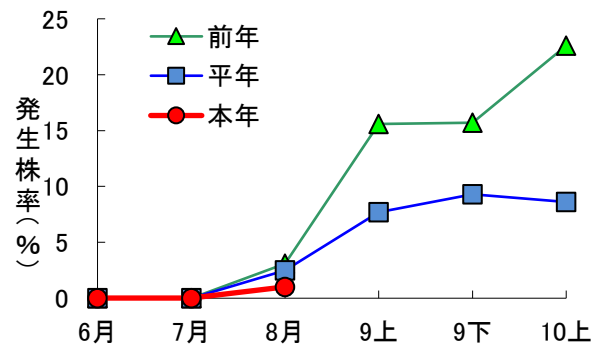


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

茎数 平年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

4. 斑点米カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) イネ科植物での捕虫網によるすくい取り虫数（表1）

平年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、発生状況を確認する。穂揃い期の20回すくい取りでクモヘリカメムシが5頭以上認められた場合は直ちに薬剤防除を実施する。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果
20回すくい取り虫数(2023年8月21日~24日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホリハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカシジカスミカメ		ミナミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市本庄	道端	イノコクサ類	0	0	1	4	0	0	0	0	0
佐賀市東与賀町	道端	イノコクサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
佐賀市川副町	道端	イノコクサ類	0	0	0	1	0	1	4	3	0
唐津市半田	畦畔	イノコクサ類	16	101	0	0	0	0	24	32	0
唐津市七山	道端	イノコクサ類	0	1	1	0	0	5	0	0	0
伊万里市松浦	道端	イノコクサ類	1	0	0	0	0	0	2	1	0
鹿島市常広	道端	イノコクサ類	0	0	10	0	0	1	1	0	0
嬉野市嬉野町	道端	イノコクサ類	0	0	3	0	0	0	0	0	0
神崎市千代田町	畦畔	イノコクサ類	0	1	2	9	1	0	1	0	0
吉野ヶ里町	道端	イノコクサ類	0	0	3	0	0	0	0	0	0
白石町有明	道端	ヒ、イノコクサ類	2	2	1	2	0	0	17	6	0
本年（平均）			1.7	9.5	1.9	1.5	0.1	0.6	4.5	3.8	0.0
平年（過去10年の平均）			2.5	6.0	1.9	0.9	0.7	1.0	7.4	3.3	0.03
前年（平均）			3.4	7.5	1.3	1.0	0.6	0.3	0.7	0.1	0.0

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

食害株率 18.8%（平年 9.0%、前年 2.3%）

平年比：やや多〈±~+〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

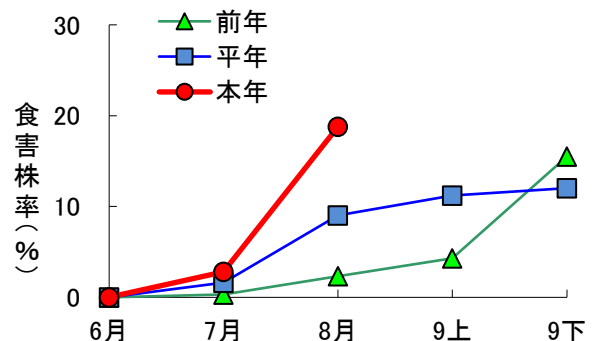
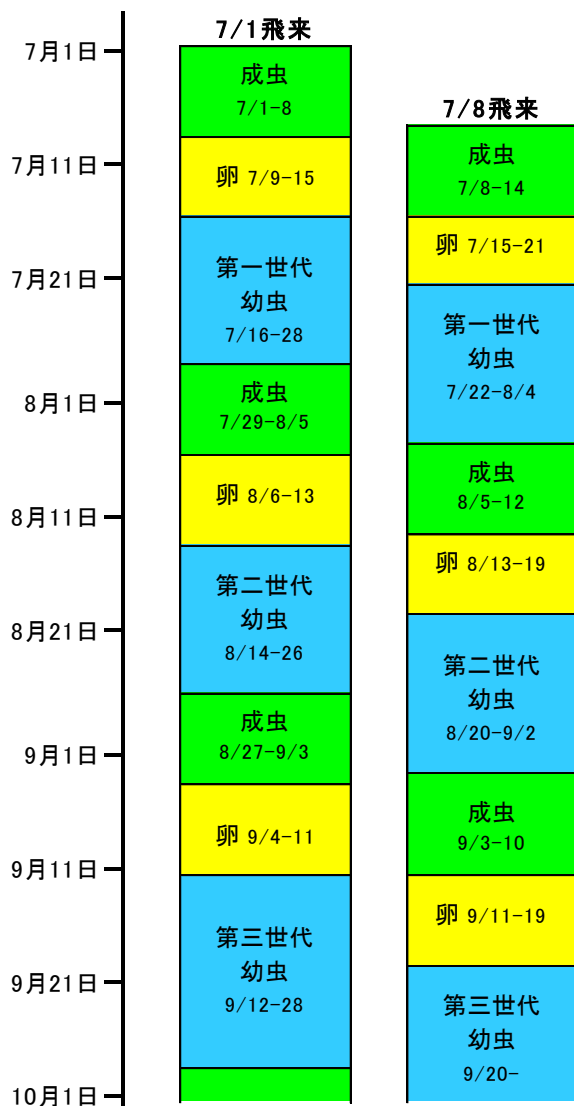


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移



共通-図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第4版、2023年8月28日作成)

1. 6月30日～7月3日頃(図では7月1日)、7月7日～9日(図では7月8日)の飛来虫を起点とし、佐賀市川副町の気温データより算出した有効積算温度(8月28日以降は平年値)を基に作成した。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、**本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認**する。

大豆

[【概要に戻る】](#)

定期調査：22 圃場
調査日：8月21～24日



定期調査圃場の様子

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率 1.4% (平年1.4%、前年0.4%)

平年比：並(±)

白変葉発生株率 0.6% (平年0.9%、前年0.1%)

平年比：並(±)

②トラップ調査 (図2 参照)【県内8地点】

平年比：やや少(一~±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

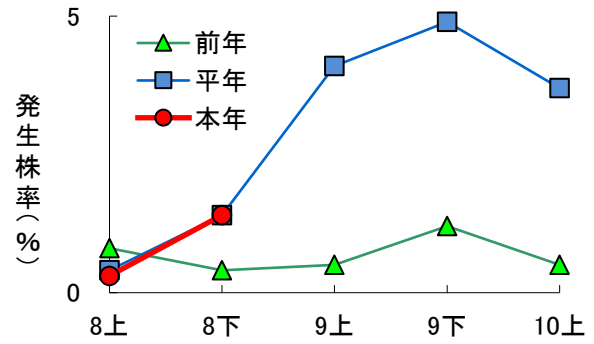


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら防除を実施する。

(2) 防除の際は、薬剤のかけむらがないよう規定の範囲で十分量を散布する。

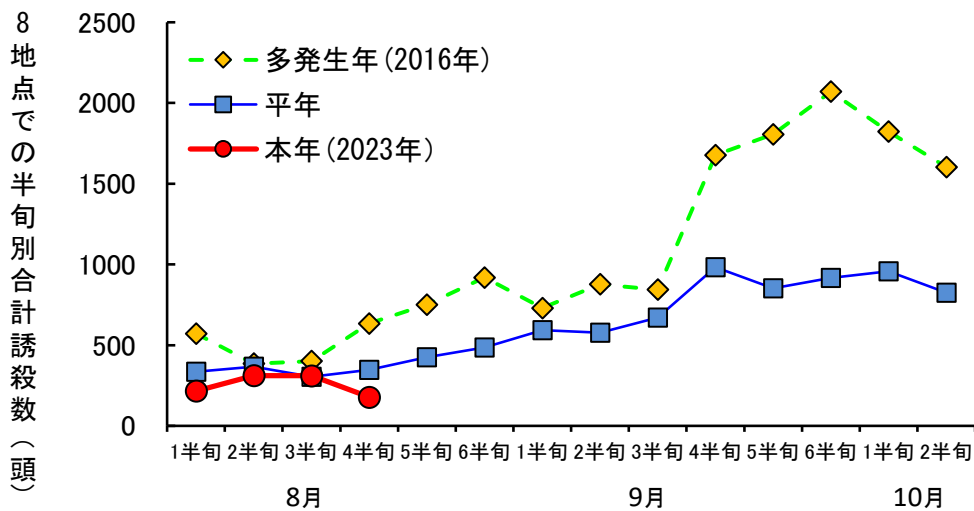


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数(8月4半旬まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

2. カメムシ類 (アオカメムシ, イモヅガメムシ, ホリカメムシ, ミナアカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率 0.2% (平年0.1%、前年0.6%)

平年比：並(±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

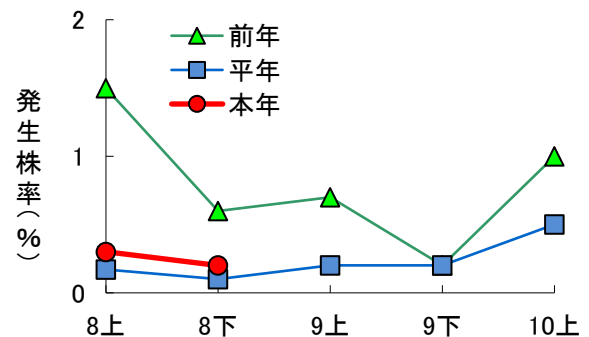


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

3. 紫斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並
- 2) 予報の根拠
 - (1) 9月の気象予報
気温は高く、降水量はやや多く、並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 若莢期～子実肥大中期に薬剤防除を実施する。

イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：10圃場
調査日：8月21～24日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：10.0%（平年9.1%、前年0.8%）
平年比：並〈±〉
 - (2) 9月の気象予報
気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

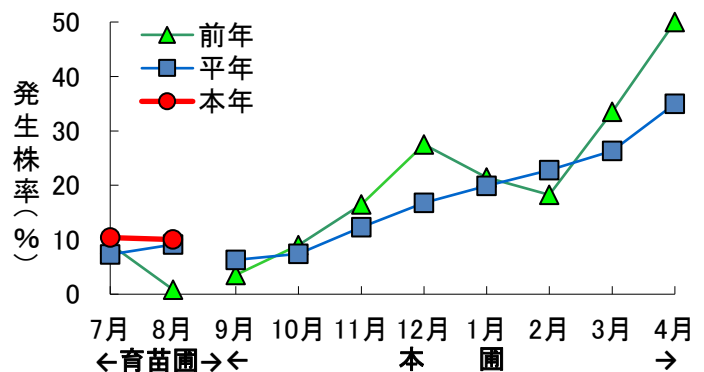


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率：0%（平年2.3%、前年0%）
平年比：並〈±〉
 - (2) 9月の気象予報
気温は高く、降水量はやや多く、並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 感染した苗を本圃へ定植しないよう、育苗期に薬剤防除を徹底する。

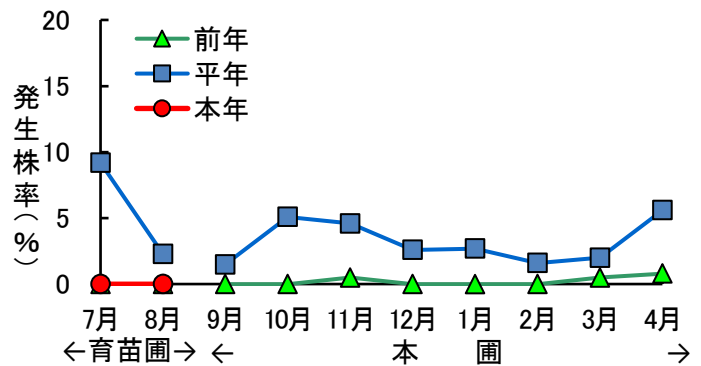


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 子苗での発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0.66%（平年0.03%、前年0.02%）

平年比：多<+>

但し、発生は圃場間差が大きい

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

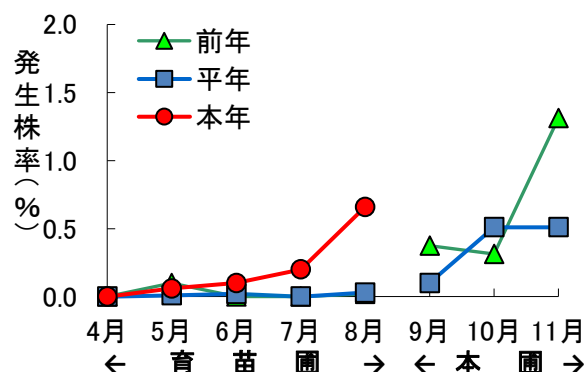


図1 イチゴ立枯症の発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8圃場

調査日：8月22～24日



定期調査圃場の様子

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：25.6%（平年20.7%、前年40.6%）

平年比：並<±>

(2) 9月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件<±～+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

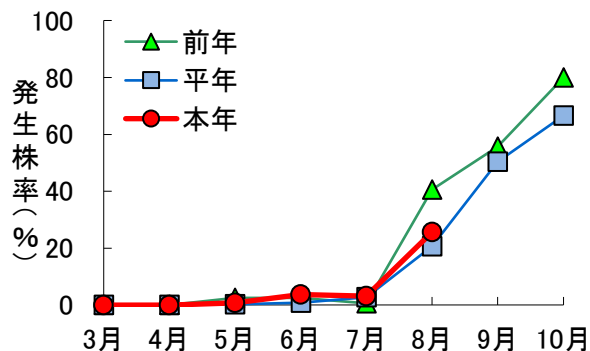


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：1.3%（平年2.6%、前年0.6%）

平年比：並<±>

(2) 9月の気象予報

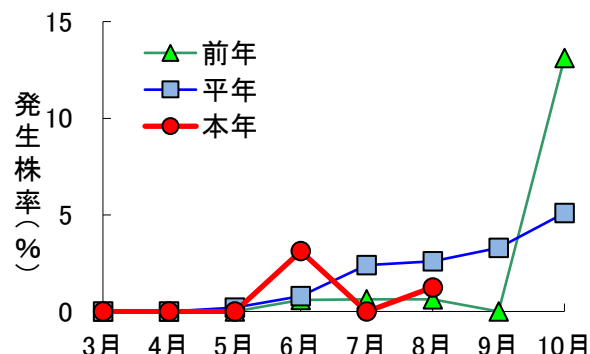


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発生すると防除が困難となるので、発生初期での防除を徹底する。

野菜・花き共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1, 2 参照）

作物名	食害株率(%)	平年比	平年値(%)	前年値(%)
イチゴ	0.4	並〈±〉	0.9	0.8
アスパラガス	0	並〈±〉	0.4	3.1

② フェロモントラップによるハスモンヨトウの8月の誘殺数は、平年よりやや少ない（図3）。〈-〜±〉

③ フェロモントラップによるオオタバコガの8月の誘殺数は、平年並（図4）。〈±〉

④ フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの8月の誘殺数は、平年より多い（図5）。〈+〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

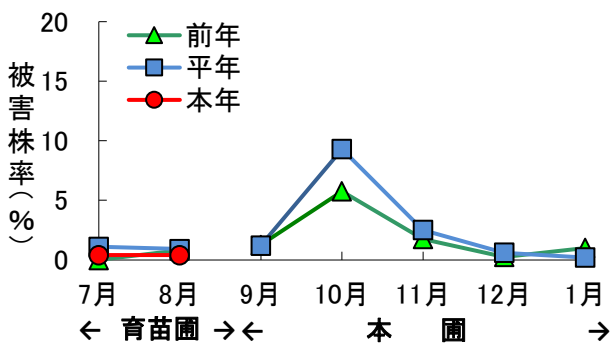


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

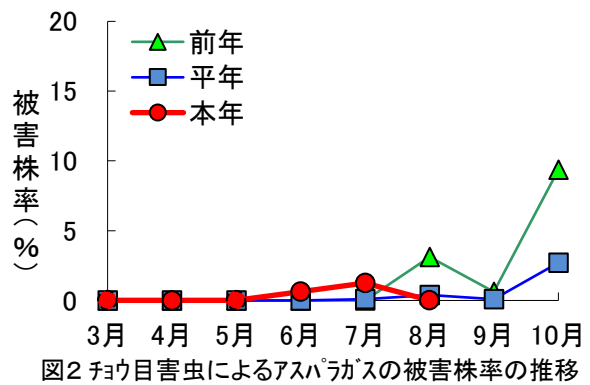


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

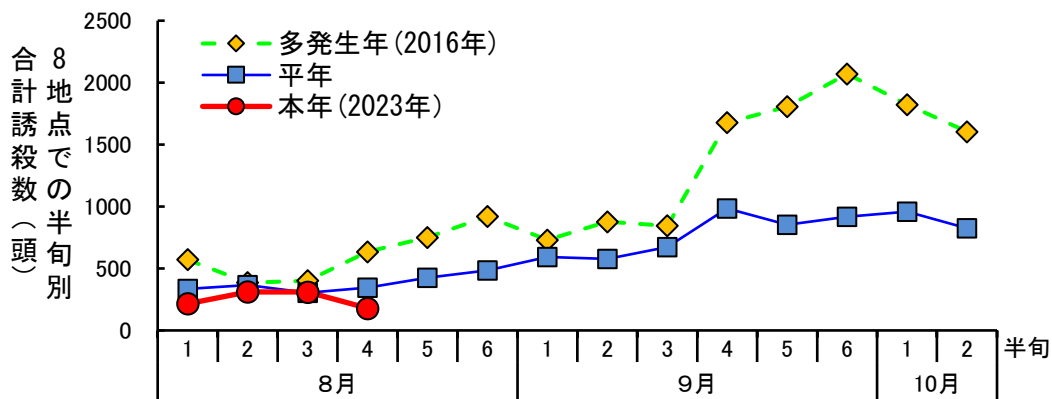


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
（農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数）

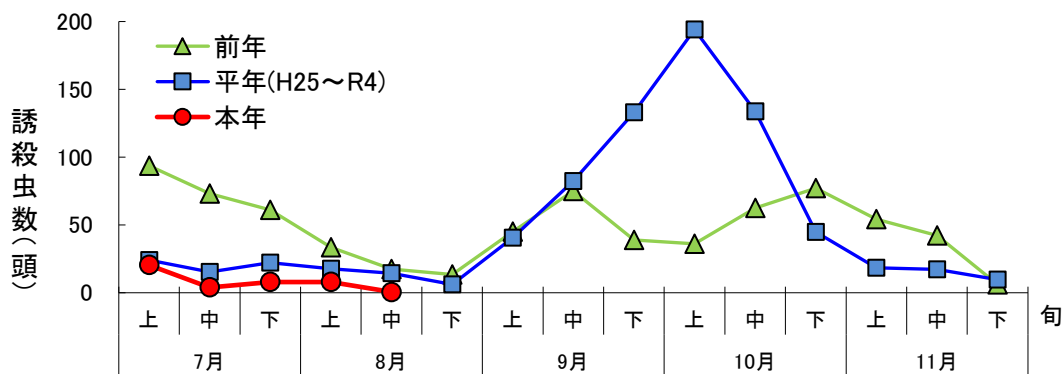


図4 フェロモントラップによるオオタバガの誘殺数
(川副町2地点の平均: 病虫害防除員1地点、農業試験研究センター1地点)

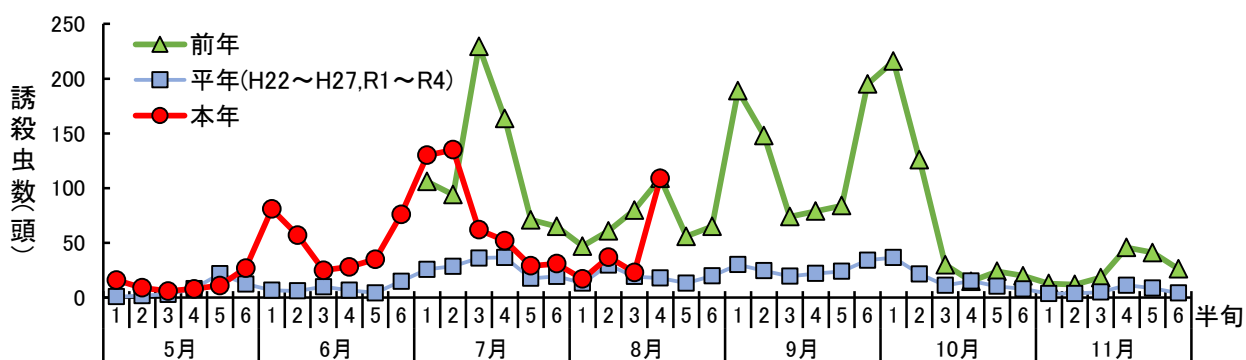


図5 フェロモントラップによるシオイモトウの半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯 (図1 参照) 平年比：多 (+)

②フェロモントラップ (図2 参照) 平年比：並 (±)

(2) ヒノキ毬果における寄生数 (図3、表1 参照、8月16~24日調査)

成幼虫数平均：42.7頭 (平年15.3頭、前年32.4頭) 平年比：多 (+)

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数 (図4、表1 参照、8月17~19日調査)

口針鞘数平均：11.2本/果 (平年13.9本、前年14.6本) 平年比：並 (±)

(4) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

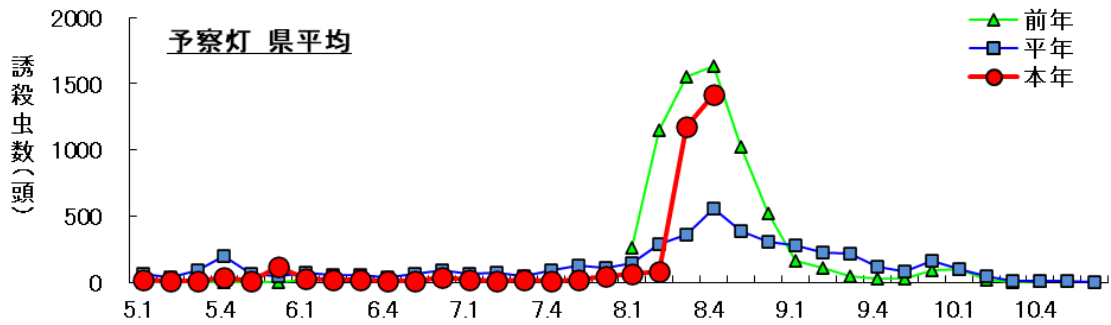


図1 予察灯（佐賀市、小城市（果樹試験場調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

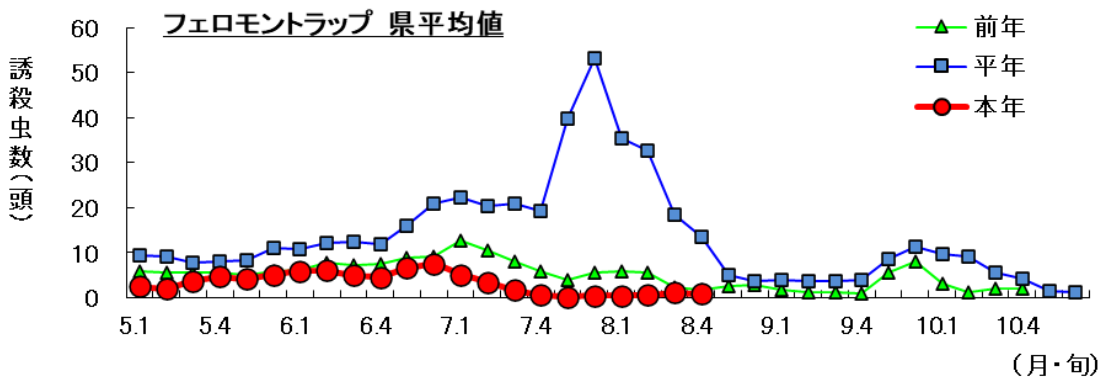


図2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査）、唐津市鎮西町（上場営農センター調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

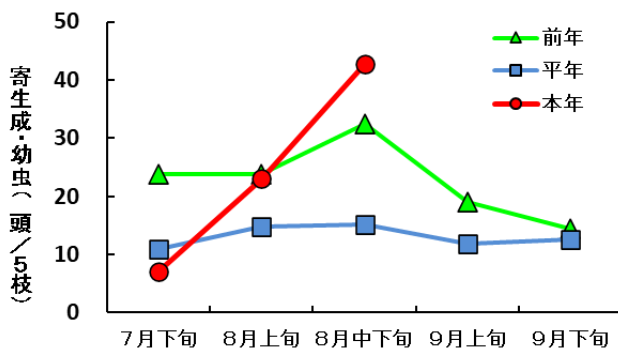


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

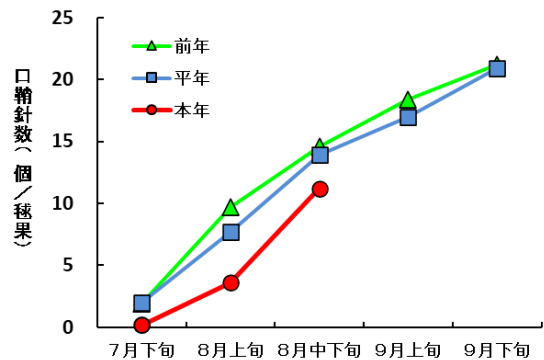


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口鞘針数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数（図3,4に関する地点別の状況）

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾						ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾			ヒノキ毬果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾		
		7月下旬			8月上旬			8月下旬				7月下旬	8月上旬	8月中下旬
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計				
1	上峰町	0	0	0	2	4	6	19	1	20	やや少	0.3	2.9	6.9
2	神崎市	1	4	5	3	6	9	7	31	38	やや少	0.6	1.5	4.5
3	小城市	0	0	0	8	5	13	39	0	39	やや少	0.1	3.9	8.8
4	唐津市1	12	4	16	42	9	51	11	7	18	やや多	0.2	2.9	24.2
5	唐津市2	2	0	2	1	1	2	40	3	43	やや少	0.1	0.2	12.2
6	唐津市3	4	0	4	33	1	34	21	119	140	やや少	0.0	2.9	16.5
7	伊万里市1	0	2	2	10	3	13	36	23	59	中	0.1	5.0	17.9
8	伊万里市2	4	3	7	9	61	70	35	6	41	中	0.2	2.4	15.3
9	伊万里市3	6	26	32	17	7	24	71	8	79	多	0.7	1.9	20.2
10	多久市	2	1	3	15	3	18	28	2	30	やや少	0.3	2.0	12.7
11	鹿島市1	7	7	14	5	2	7	14	11	25	やや少	0.1	1.0	2.9
12	鹿島市2	1	0	1	8	47	55	11	8	19	多	0.1	20.1	1.9
13	太良町1	4	8	12	0	0	0	16	10	26	やや少	0.1	0.5	5.6
14	太良町2	0	1	1	16	4	20	6	15	21	やや少	0.0	3.5	6.8
	平均	3.1	4.0	7.1	12.1	10.9	23.0	25.3	17.4	42.7	やや少	0.2	3.6	11.2
	平年	-	-	7.1	-	-	14.9	-	-	15.3	-	2.0	7.7	13.9
	前年(R4年)	-	-	23.8	-	-	23.8	-	-	32.4	やや多	1.9	9.7	14.6

1)たたき落としによる調査

2)ヒノキ毬果着果程度：福岡農総試の達観調査法に基づいて調査

- ・極少：一部の木では丈夫にも毬果が見られるが、多くの木では上部にも毬果がない。
- ・少：毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果がある
- ・やや少：毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果があり、一部の木では中央部にもみられる
- ・中：中央部まで毬果が見られる木が多い
- ・やや多：多くの木では中央部までたくさんの毬果が見られ、一部は下部にも毬果がある
- ・多：下部まで毬果が見られる木が多い
- ・極多：ほとんどの木で下部までたくさんの毬果が見られる

3)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

4)各調査日における口針鞘数から離脱予想時期(25本/果に達する時期)を推定

5)離脱予想時期の県平均は、各調査日および口針鞘数の平均値により算出

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地域等で差が大きいため、各地点の調査結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場
調査日：8 月 17～24 日



定期調査圃場の様子

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図 1、2 参照)

発生葉率：0.4% (平年 0.0%、前年 0%) 平年比：多 <+>

発生果率：0.1% (平年 0.0%、前年 0%) 平年比：多 <+>

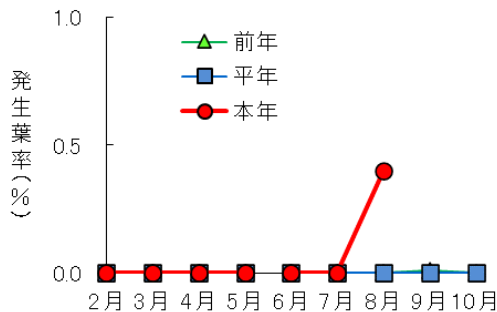


図 1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5 月下旬までは旧葉を調査

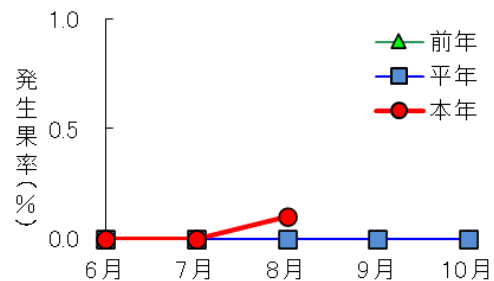


図 2 カンキツかいよう病 (果実) の発生推移

(2) 9 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 <±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生果率：10.9% (平年 12.6%、前年 5.6%)

平年比：並 <±>

(2) 9 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件 <±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) マンゼブ水和剤を散布した場合、次回の薬剤散布時期は積算降雨量が 200~250mm に達した時点を目安とする。ただし、この雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に次回の薬剤散布を行う。‘せとか’は黒点病に非常に弱いので、露地栽培では積算降雨量 150mm を次回の薬剤散布の目安とする。

(2) 枯れ枝、剪定枝、切り株等は本病の伝染源となるので、除去し適切に処分する。なお、切り株の伐根が困難な場合は、ビニルの袋などで被覆して病原菌の孢子が飛散するのを防ぐ。

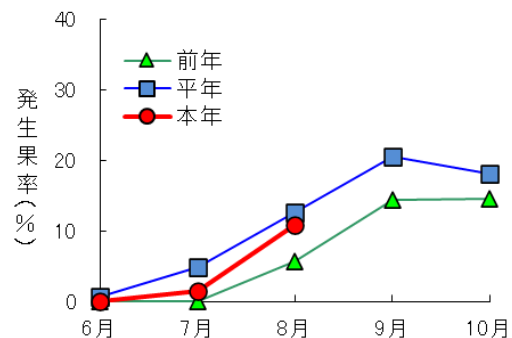


図 1 カンキツ黒点病の発生推移

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：1.8% (平年 2.6%、前年 1.0%)

平年比：並 (±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時 (寄生葉率 30%未滿または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未滿) からの薬剤防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回のみの使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

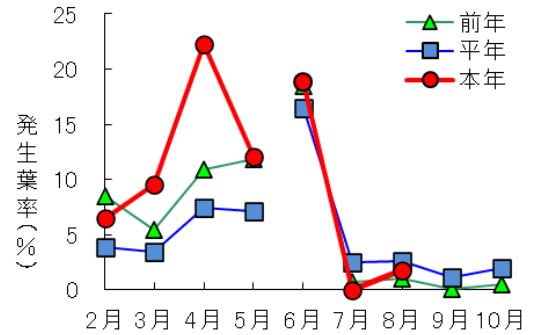


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：9 圃場
調査日：8月21日



定期調査圃場の様子

1. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① フェロモントラップ (図1 参照) 平年比：並 (±)

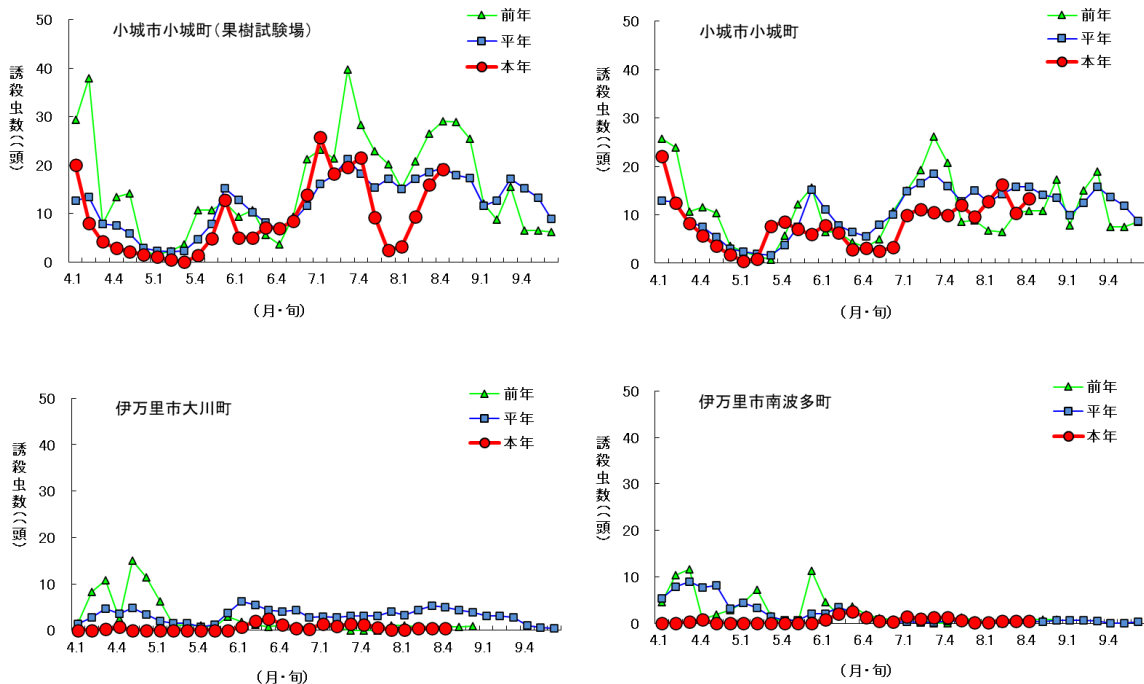


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

- (2) 9月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
(2) 使用する薬剤の選定（収穫前日数や汚れ）には十分注意し、収穫まで7～10日間隔で薬剤散布を行う。
(3) 交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：15.6%（平年7.9%、前年2.8%）

平年比：やや多〈±～+〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの防除を徹底する。
(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
(3) その他については、特記事項を参照する。

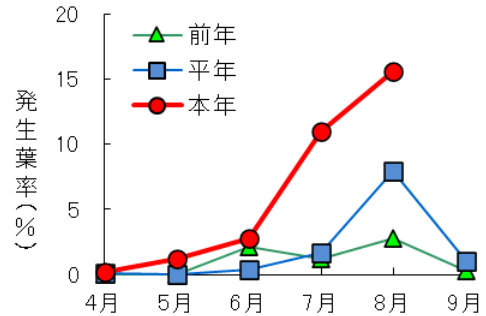


図1 ナシハダニ類の発生推移

ブドウ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6圃場

調査日：8月16～24日



1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：6.5%（平年2.6%、前年1.2%）

平年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病は降雨により伝染するので、降雨前の予防散布を徹底する。
(2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。
(3) その他については、特記事項を参照する。

定期調査圃場の様子

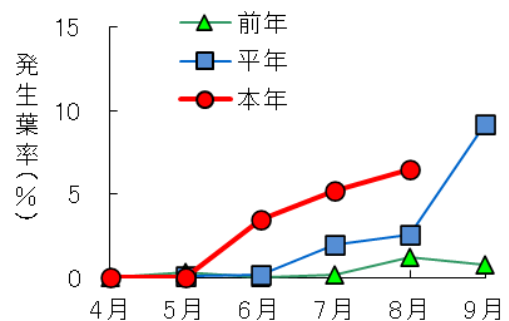


図1 ブドウベと病の発生推移

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7 圃場
調査日：8月23～24日



1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：2.9% (平年 3.5%、前年 2.2%)

平年比：並 (±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±～+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

定期調査圃場の様子

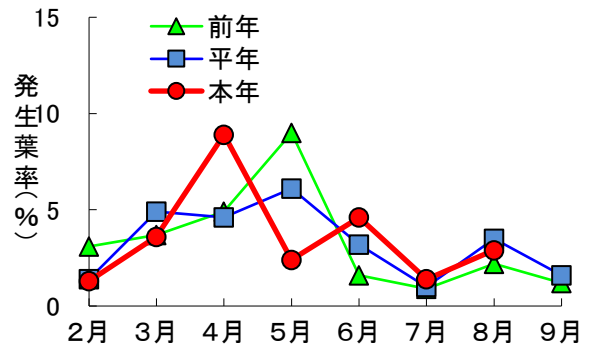


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率 (雄繭)：5.0% (平年 12.9%、前年 5.8%)

平年比：やや少 (一～±)

(2) 9月の気象予報

降水量はやや多く、やや少発生の条件 (一～±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除適期は第三世代幼虫ふ化期の9月中下旬頃である。園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期3～4日後に薬剤防除を実施する。

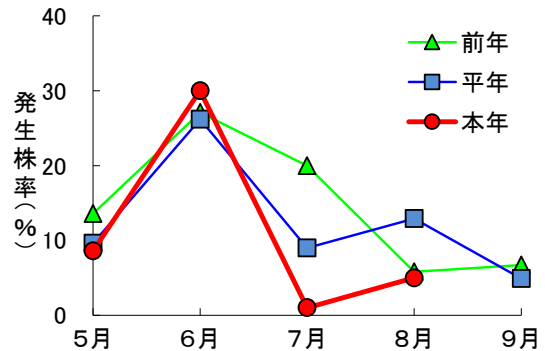


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：6.4頭/4ヶ所 (平年 28.4頭、前年 53.8頭)

平年比：やや少 (一～±)

② 吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比：やや少 (一～±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±～+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 秋期の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

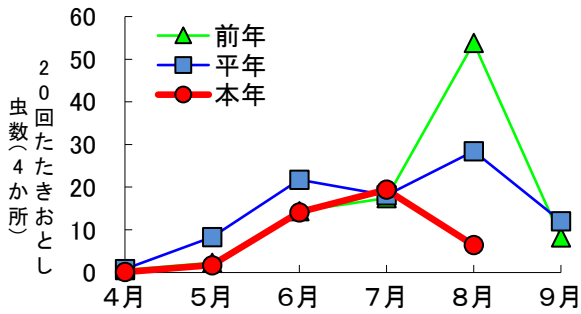


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

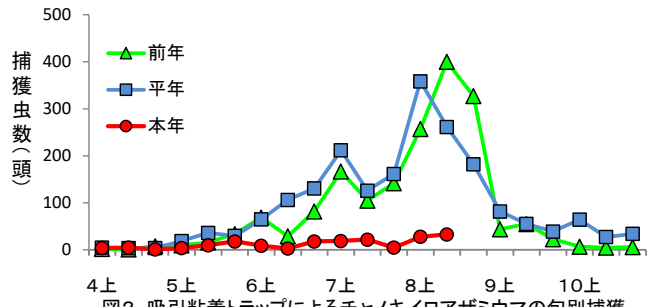


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：8.0頭/4ヶ所 (平年2.0頭、前年0.8頭)
平年比：多(+))

② 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+))

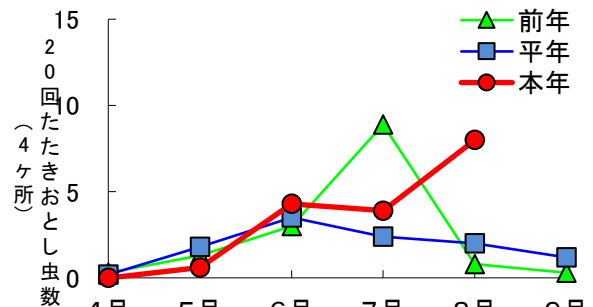


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 秋期の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

5. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

被害葉数：62.3枚/m² (平年1.4枚、前年1.0枚)
平年比：多(+))

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：並(±))

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

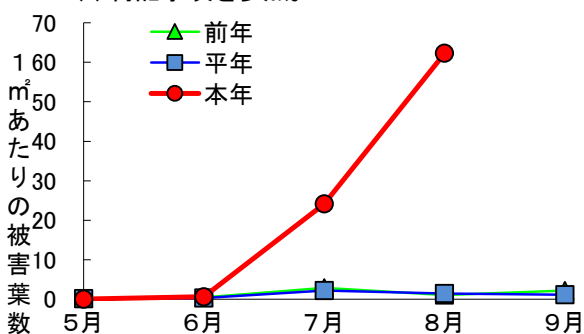


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の発生推移

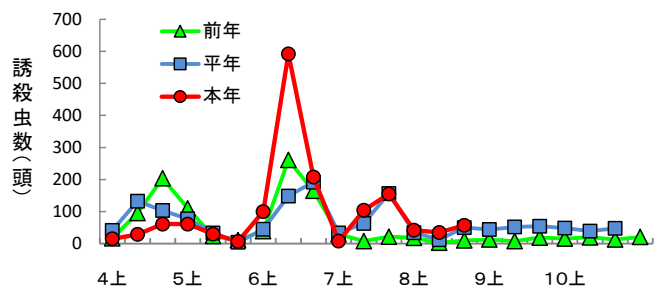


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

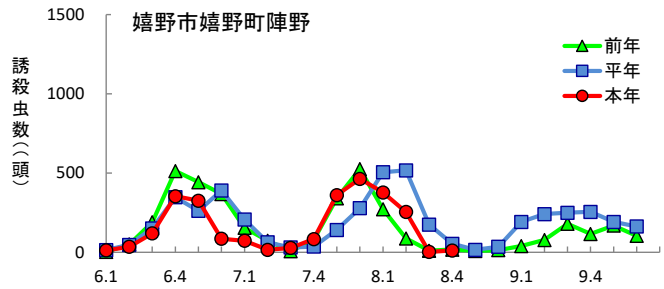
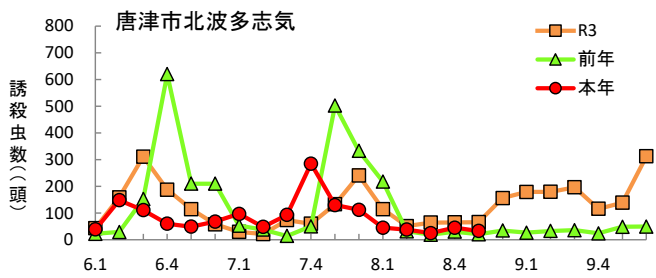


図3 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの半旬別誘殺数推移（唐津市・嬉野市、防除員調査）
 ※ 唐津市は、令和3年度に設置場所を変更したため、R3～R5のみ掲載。（平年値はなし）

6. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照、）

被害葉数：2.1枚/m²（平年0.4枚、前年0枚）

平年比：多（+）

② フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉巻前の発蛾最盛期から7～10日後に薬剤防除を行う。薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

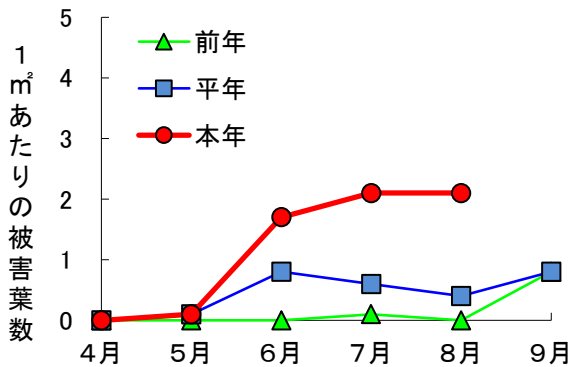


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

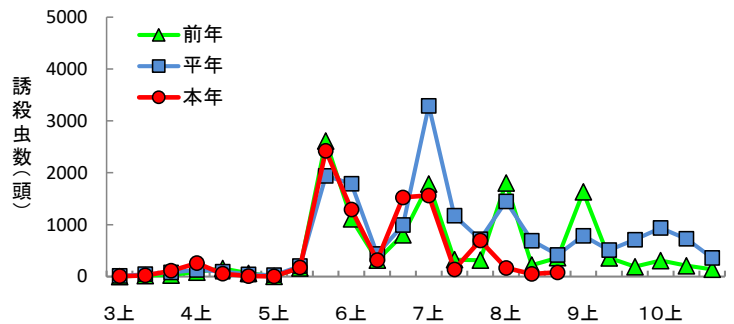


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

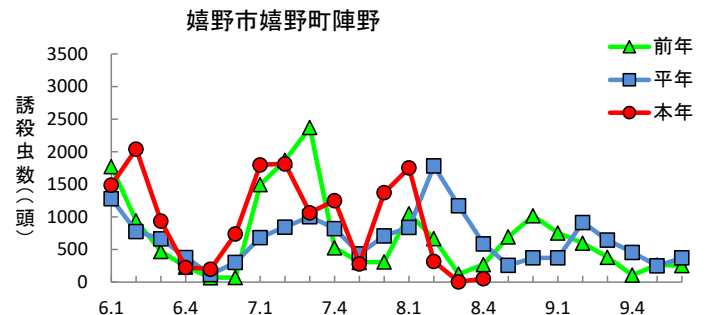
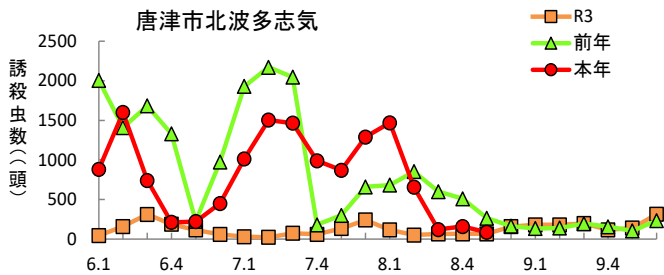


図3 フェロモントラップによるチャノホソガの半旬別誘殺数推移（唐津市・嬉野市、防除員調査）
 ※ 唐津市は、令和3年度に設置場所を変更したため、R3～R5のみ掲載。（平年値はなし）

7. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉数：12.7枚/m²（平年3.6枚、前年0枚）

平年比：多<+>

(2) 9月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

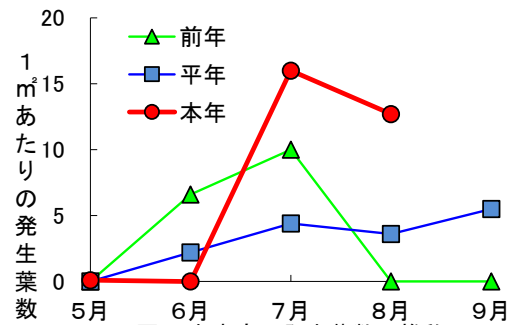


図1 炭疽病の発生葉数の推移

8. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉数：13.3枚/m²（平年1.8枚、前年3.8枚）

平年比：多<+>

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量はやや多く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

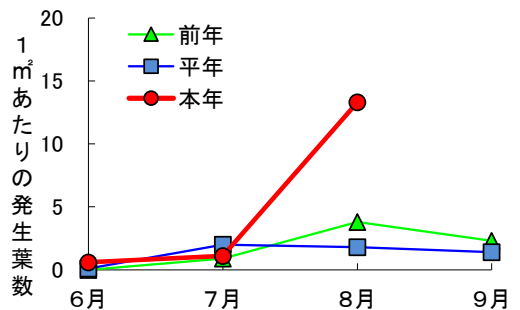


図1 輪斑病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

